

謡伝書における音声観察

——『音曲玉淵集』以外の資料から——

竹村明日香（お茶の水女子大学）

一．はじめに『音曲玉淵集』に関して

中世日本語の発音を知ろうとする際、近世の謡伝書である『音曲玉淵集』（享保十三年[1727]刊）が参照されることが少なからずある。本書の巻一・二には豊富な用例と共に連声・四つ仮名・が行鼻濁音・開合等についての記述があり、例えば、「つめ字」（促音）から母音へと移る各行連声に関しては、次のような解説がある。

(二) 一 つめ字よりうつりやうの事 つめ字よりうつりやうの事
むはまのこゝ音聲

○ あ い う え を

た ち つ て と づ

チヤモモ チエモ

月庵 ツキアン 佛意 ブツイ 悉有 シツユ 法縁 ホフエン 佛恩 ブツオン 「後略」 (『音曲玉淵集』巻一)

ア イ ウ エ オン オン 本書

しかし、「つめ字」に関する記述は、近世に流布した謡伝書『塵芥抄』（天明十一年[1583]）では、次のように簡素な記述となっている。

(二) 一 つむる字ハ 前の程をすこしおそく出して はやく話て 次の字へうつりたるよし
法廷説語のこゝ絶ず愛別難言のことわり 此等也 書良されず

能楽研究で『音曲玉淵集』は、「響者の見識が発揮された独自性を持つ内容」（能研編一九九八：四一六頁）と評されており、実際その通り本書は当詩出回っていた他の謡伝書とは毛色が異なる。

本書には、契沖などの国学の知見が取り入れられていること（皇編一九四四他）、そして、「日常ではなくなっている音韻特徴と発音方法を詳細に解説する」（『日本語学大辞典』）ものであるという見方が従来行われてきた。しかし近年、本書以外の謡伝書を調査した研究では、むしろ反対に、謡伝書の発音知識を国学者らが自著に取り込んでいること、また謡伝書は先進的な音声分析を行っていたことが明らかになりつつある（後述）。

本発表ではこうした点をさらに明らかにすべく、謡伝書における音声観察と、近世国学者におけるそれらの撰取状況を示したい。

二．室町後期以降の謡伝書の特徴——表・竹本（一九八〇）より——

▶権威付けのために故人に仮託する傾向あり。師から相伝された伝書を、謡教寄の素人が合成・再編して再伝するため内容が没個性的。流派の特定ができない。

¹ 『音曲玉淵集』の項 兵本清寛執筆、日本語学会編（二〇一八）『日本語学大辞典』東京堂出版 一〇五頁。

▶「ほとんどが能楽論にはほど遠い内容の語の技術記号書で、世阿弥・禅竹の音標論とは明らかに一線を画し、禅鳳の論よりもさらに具体的かつ便宜的である。」(三二一頁)

一方で日本語学的観点から見ると、興味深い記述が随所に見られる。(以下、傍線部は筆者注)

三 例(一) 濁音前鼻音

中世までは [ŋa] [da] [ba] のようにガ・ダ・バ行濁音に前鼻音が伴っていたことが知られている。濁音前鼻音に関する記述は、中世では『日本大文典』(1604-08年)のような外国人宣教師によるものが最も早く、日本人の手になるものとしては『以敬齋口語韻書』(1697-1731頃か)が最初とみられている(高山一九九〇)。ところがそれより三十年ほど早く寛文三年〔1662〕刊の『謡鏡集』(別名：うたひ鏡)には、ガ行・バ行の濁音前鼻音を記したと見られる例がある。

(三) 牙音の濁音と云へ。牙齒ともにひと敷ひらき舌を上あぎにつけず。下ばのうちに付て。声を出す濁音と云へ牙齒隨かに合て。はなの中へ少声をかよへしてうたふ事なり

(『謡鏡集』「第一 五音濁音之事」)

(四) 唇の音の清と云へ上上の齒をひらき。舌を正中に置。急に声を出すなり。濁音と云へ上上の齒を隨に合て。声を出すべしとおもふ時。鼻のうちに心をかけ。声を出す事也

(『謡鏡集』 四石)

▶上巻のみ(元三巻本か)に、孝草不明。版元「京 一条通新町西入」。

▶「先行諸書そのままの転載とおぼしき記事は皆無に近く、当世風に演繹して説き直され、(中略)貴人に所望されて清経の曲舞以後を謳った由が見え、どこかの段階で女人が編纂に関与して成立したらしい。」(能研編一九九八、二八六頁)

四 例(二) アクセント

胡麻草でアクセントを示す例としては、世阿弥能本や近松滝増謡譜本がよく知られている(坂本二〇〇〇他)。金春禅竹『毛端私抄』にも「いぬ(犬)」の方言アクセントを述べた記述があるが、謡伝書の中には、より多くのアクセントを示した例がある。

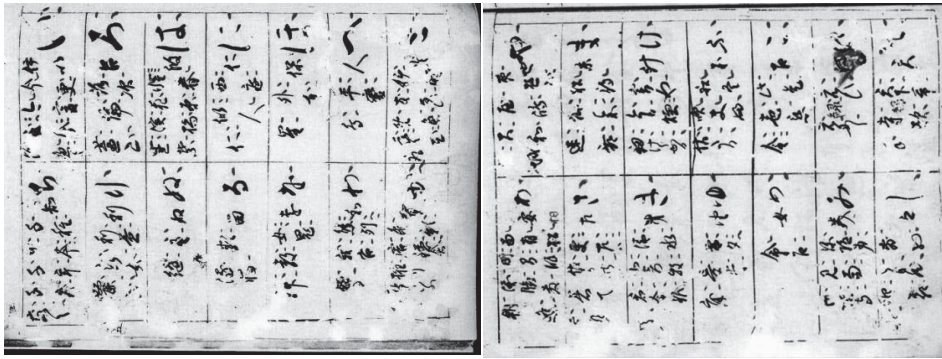
▶奈良県宗宝山寺所蔵の金春家旧蔵伝書の一つ。仮綴大本。江戸初期の写しか。

▶伝・金春宗鶴著『宗鶴袖下』記載後の教字に、胡麻草付きで「いろは」順に並べた語彙やアクセント型ことに並べた語彙が掲載されている。

【図一】『金春流詠口伝集 宗因袖下』(般若堂文庫二-019)

² 早稲田大学演劇博物館、神戸女子大学琴修文庫、野上記念法政大学能楽研究所(刊本の写し、巻三七-113)、高知城歴史博物館山内文庫(書名「宇多伊茂の」)に所蔵がある。

³ 金春宗鶴は、禅竹の子で、禅鳳の父である金春元氏。『宗鶴袖下』は、金吾々条の書で写本も多いが、内容からみて宗鶴の著述であることは否定されている(表・竹本一九八八：三二三-三二四頁、能研編一九九八：一三三頁)。



主に、高アクセントを示す「一（平胡麻）」「ノ（上げ胡麻）」と、低アクセントを示す「ノ（下げ胡麻）」を朱で附している。いろは順語彙は約二百語、数字が約二十語、「上下の文字」が約百語、「下ををとす文字の事」が約三十語、「中ををとす文字の事」が約二十語あり、「上下の文字」以降はアクセント型ごとに語を羅列している（※以下、Hは高アクセント、Lは低アクセントを示す）

(五) 禪^二 (H H H) 春^レ (L H) 花^ノ (H L) 原^ノ (L H) 濱^二 (H H)
 橋^ノ (H L) 生^二 (H L L) 葉^一 (H) (いろは語彙「は」の項)

(六) 春^カ 秋^キ 夏^カ 冬^キ 空^{カラ} 其^カ 方^カ 中^カ 経^カ 常^カ (※傍線部アクセントは存疑)
 舞^マ 酔^マ 誠^マ 露^マ 出^マ 御^マ 我^マ 縁^マ 只^マ (上下の文字)

(七) 月^キ 雪^キ 花^カ 波^カ 雲^カ 清^カ 夏^カ 北^カ 山^カ
 天^{テン} 音^{オン} 寺^ジ 歌^カ 事^ジ 後^カ 本^{ホン} 旅^{リョ} 又^{マタ} (下ををとす文字の事)

「女^ニ (H H L)」（現代京字はH L L）等の例から、本資料は近世初期の京阪アクセントを反映していると思われる。単語をアクセント型ごとに分類をしようとする試みは、現代の「アクセント類別語集表」とも通じるものがあり、分析観点として注目される。

五 『塵芥抄』と『筆之次』

謡伝書の中で最も著名で、永く流布した謡伝書に『塵芥抄』とその解説書の『筆之次』がある。

- ▶ 『塵芥抄』：天正十一年〔1583〕年成立。一つ書きで謡・音曲関係の説を羅列し、謡の用語の解説が主体となっている。伝本多数。後代への影響力が大きい（能研編一九九八）。
- ▶ 『筆之次』：寛永十九年〔1642〕成立。進藤以三著。『塵芥抄』の本文を一つ書きで引用した後に解説を付す（辻一九八二a・b）。積極的に門弟に書き与えて同門の弟子たちへと伝播していったらしく、伝本多数（田喜山二〇二二）。

⁴ 「ノ」の胡麻字はH L Lと解釈すべきことが原本（二〇〇〇）でも指摘されている。

⁵ 進藤以三（？―寛文二〔1662〕没。進藤流の始祖・進藤久右衛門忠次の嫡男。舞台には立たず、寛永十元禄初年頃まで京都で楽謡の普及・指導に努めた。近衛尚嗣や飛鳥井雅章の日記に以三の謡に関する記述が現れ

『音曲玉淵集』には「進藤以三」の名が見え、また『筆之次』(巻四)という形で引用もしている(辻一九八二a)。その『筆之次』には発音に関する記述が頻出する。

五 一. アクセント核を養む「アタル」

『筆之次』ではアクセントを説明する際、「アタル」という節名をアクセント核を表す術語のよう¹¹にして用いている(竹村二〇四)。「アタル」は一モータ目を高く発声し、後続の一モータを低くする節である。

(八) 源氏供養の曲舞に、心をかけてといふ心のなかのこの字を字あげて、世間にうたひなれたれども、あしきふしなり。はじめのこの字に、あたりてうたふべし。

(「文字なまりはむろし」)

(九) 又関字に、さしなみやはまの真砂へつくる共、此くの字のあたりやうにて、作の字に成て
わろし。くの字をあげて、るの字をびて、るの字ひらくやうに「養養養」く¹²の字に¹³あたる、

(中略) かやうにあたれば、盡の字になりてよし。(「しやうを文字にうたふといふは」)

「アタル」は中世から使用されていたと見られ、永祿三年〔1560〕奥書の謡伝書にも見られる。

(十) a. ■「養」当。文字アタリ。此次ノフシ必サガル成。

b. 一、「当」の字付ル事、一字はつて二字めさがる也。

(「節草句秘伝抄」所収「通景彦次郎久長伝書」)

右の通り、『筆之次』では、下降を表す節である「アタル」を用いてアクセントの正誤を説いている。それは即ち、「単語のどこに下降があるか」というアクセント核の位置を問題にしているということであり、「語内の下降位置によりその語が同定される」という日本語アクセントの一特徴を近世の謡役者が認識していたことを表しているのである。

また本書では、「常にいふ詞(「日常で言う言葉」)ではどうか」という記述が複数回見られる。

(十一) 「養字の四声に合わせて講うべきだと説いた後」但、かやうに四声のせんさくのシにしては、一ふしもなるまじき也。故いかにといふに、常にいふ詞にもちがひ多し。たとへば、※
養養養補—山の一字ではやの部分が高くなるが、山姥と云時は、山といふやの字さぐる也。

(「筆之次」「草句のならひの事」)

従来、『音曲玉淵集』では、中世からの伝承音が保存されていると見なされがちであった。しかし少なくとも近世前期に流行した進藤流の謡伝書では、「常(日常)」で用いる語のアクセントをも分析対象とし、日常語の発音を合理的に分析しようとする科学的態度を示していた事がわかる。

六 近世學者と謡伝書—「分析の枠組」としての間接的利用—

近年、謡伝書の発音分析が国学や歌学に取り込まれていたという指摘が行われている。

る。堂上公家集の愛顧に支えられて活躍した(宮本二〇〇五)。江戸初期には進藤流謡本は観世流謡本に次いで多く刊行されており、観世座に並ぶ勢いであった(表一九六五)。

- ▶ 本居宣長『漢字三音考』(天明五年 [1785] 刊) の四声観は、『塵芥抄』の「チャワンテンモク(茶碗天目)」の四声観に由来する(竹村二〇三)。
- ▶ 契沖の仮名遣書には、進藤以三著の謡伝書『筆之次』の利用の跡がある(竹村二〇四)。
- ▶ 歌学書の四つ仮名に関する言説は、謡曲から流入している可能性がある(山田二〇四)。

契沖や宣長は、「本文の引用」という直接的な形で謡伝書を利用せず、「分析の枠組み」として用いるという間接的な利用していると発表者は考える。つまり彼らの音声分析の背景には、謡伝書の発音知識が存在したと考えるのである。以下、その事例を二点挙げる。

六 一. ヲは軽くオは重し ―オラの軽重―

本居宣長の『字音仮字用格』(安永五年 [1776]) における「喉音三行弁」と「おを所屬弁」は、約六百年にわたる五十音図のオラの位置錯誤を糾したものと名高い。宣長は「喉音三行の区別を大枠開合で説明し、『於乎』については『皇国の音の軽重』という独自の概念を設定」(釘貫二〇七、頁) することで解決を図った。

(十二) ソモく古ノ仮字ハサヲ二開合ヲ以テ分ケタルモノニハ非レドモ、自然ト開合ニテ分ル、理アリ、マツ開口音ハオノヅカラ軽ク、合口音ハオノヅカラ重シ、此軽重ハ韻書ニ云トコロノ者ニ非ズ、御国ノ音ノ軽重ヲ以テ云也

(『字音仮字用格』『字音仮字総論』『本居宣長全集』巻五 三三七頁)

釘貫(二〇七)では「古代国語の発音を独自に規定した『軽重』のアイデアがどこからもたらされたのか詳らかにしないが、ア行ワ行の仮名の弁別を『軽重』で説明するのは武州麻布の通字『和歌重輕抄』に先例がある」(九五頁) と述べる。

『和歌重輕抄』は、宝暦四年 [1754] 刊のテニヲへと仮名遣いに関する書である(佐藤一九七六)。本書では確かに、左のようにオラの軽重について触れている。

(十三) 「前略」いろは四十七字の内 いゝ をお 江とて同じこゑのあるはいはかるくゐはおもし。をは。かるくおはおもし。江はかるくゑはおもし。

(『和歌重輕抄』、佐藤一九七六：五九頁より引用)

一方で、謡伝書でも「かるし」「おもし」は謡の基本的な用語として中近世に頻出する。

(十四) 音曲をかるきおもきと云事 世上に申あつかひ伝る いかん大方ハはやさをかるきといひ しつかなるをおもきと申伝るか 此覺得大事の相伝也

(『音曲口伝』『音曲に糸々儀あり』永正十八 [1521] 年奥書)

(十五) 一、惣別、うたひに、おもふ・かるいといふ事、よくしりたるがよし。

(『全善安照秘伝書』慶長十一 [1606] 年奥書)

(十六) 惣別軽き字ハ小に 重きハ大成へし 「中略」口伝の上 亦分別成へし

(『塵芥抄』「同四十条段の口伝と云事有」)

直長に先行する契沖は、稿本『和字正鑑鈔』にて明確に、「音曲」を生業とする者が「オはヲより重い」と言っていることを記している（刊本では削除）。

(十七) <鑑> わるうゑお、此ゑうゑおの四字は、ゐは和以切、うは和字切、ゑは和江切、おは和遠切にて、能生のわの聲既に尤も重ければ、所生のゑうゑお、本音のいうえをよりは重き理なり、音曲を業とする者、おはをより重しといふは、此理をきける歟、其外は沙汰なき歟
(自筆稿本之本『和字正鑑鈔』、全集十卷、二九八―二九九頁)

「音曲」が謡を指すとすれば、どのような記述があつたのだろうか。その一例となるのが宝暦五年〔1755〕山岡孫三郎筆『謡道秘蔵鈔』である。本書は、『和歌叢覧鈔』刊行翌年の成立である。

(十八) 一 文字あつかひ開合の事

附色当色落息当
イトゐ をトお ベトえ シトち
じやう ちやう そう はう きやう けふ
じ ぢ よく／＼ 諷分候事
色当やはらかにあたる 色落やはらかにおとす女に多し 息当のともりはなへ
返し当ル
(宝暦五年山本孫三郎筆『謡道秘蔵鈔』)

ただし記述内容には差が大きく、両者に影響関係は見出しがたい。仮名の軽重や開合、四つ仮名を記すことから、右の記事は先行する仮名遣書からの引用である可能性もある。しかし「し」と「ち」も軽重で捉えていること、節の説明も添えていることなどを勘案すると、仮名遣書とは別の、謡の世界におけるオヲの軽重に関する説を収めたものとも考えられる。直長や契沖のオヲの軽重に関する言説は、こうした謡伝書の中から借用された可能性が十分想定し得るのである。

六二 仮名を引くと母音が出る一聲音における母音の析出

直長の「おを所属弁」では、五十音図のア行とワ行のヲとオの錯誤を修正するために、①於が安以字衣と同類であること、②於が「お」に連なることを統一的に捉えようとした（鈔二〇七―二一頁）。その①の証拠として、「地名の引き母音として安以字衣類とともに於類の仮名が用いられること」、神楽や權馬楽などの「長ク引ヲウタフ声」に於が用いられていることを指摘する。

(十九) 「…」本國ヲ紀伊トカクガ如シ、伊ハキノ韻也、「…」備中ノ郷多郡宇「…」日向郷名
觀喉「…」をノ仮名ヲ加ヘズシテ、皆お二用ルハ餘餘等ノ仮字ヲ加ヘタル (中略) 凡テ韻ハ
あいうえお二限レルコトナレバ、是又あ行ハおナル明証ナリ、

。鴻山文庫三七七。能登編（一九九）によると山岡が師匠の橋橋修貞から許されて転写した本であるという。本書は、『觀世大夫の法名列記や觀世流演目記載からも、本書が觀世流の人の手で編まれていることは確かである。橋橋修貞が觀世流を傳へた人物で、墨書言の指導を受けた人物の筆名などに基づいて編んだ書ではあるまいか。筆者の山岡はそれを忠実に転写しただけのようである。（二四三頁）とある。山岡、鷹橋ともに未詳だが、山岡は江州の武士かと推測されている。山岡は寛延四年山岡孫三郎筆『謡書』（鴻山文庫三七七）も残している。

(二十) 又神樂サイバラ歌古本ニ、長ク引ウタツ聲ニハ、各其韻ノ安以字衣於ノ字下ニ添テ書ルニ、こそとのほもよろをノ聲ニハ、ミナ於ノ字ヲ添タリ、求子ノ歌ニ、安波禮衣十者也布留置茂能也之呂於「中略」云々 (同右)

特定の章節(仮名)を引くと母音が出るという記述は、謡伝書にしばしば見られる。『筆之次』を含む『塵芥抄』系謡伝書においては、「文字うつり」の条に現れる。

(二十一) 此うつり〔※義義補「文字うつり」〕の事、たとへば井筒に、何の音にか、此のより、音のをに取つて程也。のをひけば、をの字出る也。「中略」又「二字うつり」と云も、たとへば江口に、捨人をおもふ、此捨人のとより、をの字出るうへに、又をの字二つ有。「中略」きの字にいの字出、くの字にうの出る也。 (『筆之次』「文字うつりとく」)

(二十二) 是へ何にても字を引候へへあとに一字つゝ字をうむ物なりたとへば、らの字を長く引候へへあの字出きたとへへさひしき遣すから秋のかなしみと云所、らの字を引、あの字を云にをよばさるや (『謡伝書(謡書)』「文字うつり」 慶安三年〔1650〕刊)

梨沖『和字正藍鈔』巻一では、梵字の説明において、音を引けば摩多(母韻)になることを述べる。ここでは『筆之次』(二十一)と同じくカ行の例を挙げている点が注目される。特に自筆稿本(乙本)では仮名を用いて書いていることから、『筆之次』と類似性が高い。

(二十三) 枳を引けば伊となり。俱を引けば字となり。計を引けば或となり。古を引けば遠となりて。韻皆摩多の聲に帰る故。点書すなほち韻なり。 (刊本『和字正藍鈔』十一ウ、『梨沖全集』巻十、一一八頁)

(二十四) くきを引けばいとなり。くを引けばはうとなり、けを引けばえとなり、こを引けばをとなりて、へひつき、く皆摩多の聲へに帰る故。点書すなほち韻なり。 (自筆稿本乙本『和字正藍鈔』九ウ、『梨沖全集』巻十、二九六頁)

宣長や梨沖の記述を読むと、地名や催馬楽、梵字などの例から母音の析出に気づいたかのように受け取れる。しかしこれらは検証材料として挙げているだけであって、「仮名を引けば母音が出る」という着眼点そのものは、検証以前から謡や謡伝書を通じて知っていたとしても不思議ではない。彼らは謡伝書の発音知識を援用し、演繹的に検証を行ったとも考えることができよう。

勿論、謡伝書では引き母音を「を」としており、「お」を想定した宣長の理解とは隔絶している。宣長は謡伝書の記述を盲信するのではなく、音声的分析として信用に値する部分のみを「分析の枠組み」として利用したと言えよう。つまり引用のような直接的利用ではなく、間接的利用である。その態度は『筆之次』の不整な部分を削除し、合理的な部分のみを仮名遣書の記述に利用した梨沖とも通じている(付料二〇二四参照)。

近世において謡伝書は、当代語をも分析対象とした先進的な音声観察を行っていた。国学者らはそこから学び取り、有用な部分だけを間接的に利用する手法を採ったと考えられるのである。

七. まとめ

- 一. 近世初期の謡伝書では、調査音学的な分析や、アクセント型の体系的把握を行うなど先進的かつ合理的な試みを行っていた。特に『筆之次』では「アタル」という節名で語のアクセント核を示す他、日常語の分析も行っている。
- 二. 近世国学者らは謡伝書の発音知識を間接的に利用している。契沖や宣長の著述に現れる「オラの軽重」や「長音化による母音の析出」という観点は、謡伝書でなじみのある内容であり、彼らは分析の枠組みとしてそれらを利用したと見られる。

【参考文献】※傍線の略称名を用いたものもある。

- 嵩淵祝太郎(一九四四)『謡曲発音資料としての謡曲豪華抄』橋本博士選歴記念論『国語学論集』、岩波書店
表章(一九六五)『鴻山文庫本の研究』わんや書店
表章・竹本幹夫(一九八八)『四室前後期・江戸初期の伝書とその特質』『岩波講座 能・狂言 能楽の伝書と芸術』岩波書店
釘貫亨(二〇〇七)『近世仮名遣い論の研究』名古屋大学出版会
坂本清恵(二〇〇〇)『中近世音調史の研究』笠間書院
佐藤昌男(一九七六)『和歌豪華抄——翻刻——』『藤女子大学国文学雑誌』一九
田草川みずき(二〇一二)『浄瑠璃と謡文化——宇治加賀屋から近松・義太夫へ——』早稲田大学出版部
竹村明日香(二〇一三)『宣長と謡伝書——『源字三音考』にみる四声観の摂取——』第二回日本文学研究会
発表資料
竹村明日香(二〇一四)『契沖の仮名遣書における『塵芥抄』系謡伝書『筆之次』の利用の跡』第二三四回国
語学学会研究会発表資料
高山知明(一九九八)『十七世紀末の前鼻音の事態について——『以敬齋問書』『和字正鑑鈔』の再検証——』
『香川大学国文研究』二十三
法宏(一九八二a)『資料紹介 筆の次』『芸能史研究』七八
法宏(一九八二b)『準藤以三の謡の特徴について——謡本と『筆の次』を中心に』『国語と国文学』五九—
野上記念法政大学能楽研究所編(一九九八)『鴻山文庫蔵能楽資料解題(中)』第三部 注釈書・伝書・他』
野上記念法政大学能楽研究所
宮本圭造(二〇〇五)『第五節 準藤家の人々』『上方能楽史の研究』和泉書院
山田昇平(二〇一四)『「むむの下濁る」という言い習わしの歴史』『国語国文』九二—

【調査資料(引用したものに限る)】(鴻山文庫＝鴻 般若檀文庫＝般) ※引用順に掲載

- 三浦康栄著・濱田敦綱並問題(一九七五)『音曲玉淵集』臨川書店 『塵芥抄』金泥表紙本(鴻三七・10)、
『謡鏡集』(神戸女子大学森修文庫本)、『金春流詠口伝集 宗因袖下』(般二〇19)、謡の秘本『筆の次』(彦根
城博物館録彦文庫本。引用には註一九八二aを用いた、表章校訂；法政大学能楽研究所編(一九七三)『能字
資料集成二・細川五郎伝書』わんや書店(※『御草句秘伝抄』収録)、表章・小田幸子校訂；法政大学能楽研
究所編(一九七八)『能字資料集成九・金春安照伝書集』わんや書店 久松潜一校訂代表(一九七三)『契沖全
集 第十卷』岩波書店、大野野田昌綱著(一九七五)『本居宣長全集第五卷』筑摩書房、宝暦五年山本孫三郎
筆『謡遺發感抄』鴻三七・77、慶安三年刊『謡花伝書』(謡書) 鴻三七・38

付記：本発表は、科研費19K13200、24K03916の研究成果の一部である。